

S2-6

長期予後からみた局所進行肺癌－癌性胸膜炎－
の治療戦略

浜松医科大学 第一外科

鈴木 一也, 高持 一矢, 春藤 恭昌, 船井 和仁, 浅野 寿利

【目的】胸膜播種および悪性胸水を伴う局所進行肺癌に対する確立された治療法はなく、予後は不良である。集学的治療の一環としての灌流による温熱化学療法の実績と問題点を報告する。【対象と方法】胸膜播種および悪性胸水を伴い、灌流による温熱化学療法を施行した原発性肺癌 113 例を対象とした。胸水細胞診陽性例は、胸腔鏡下に灌流を行い、続いて全身化学療法を追加した。播種だけの症例では、肺切除と可及的な胸膜切除を行い、播種が広範な症例では胸水細胞診陽性例と同じ扱いをした。抗癌剤を含む生食で胸腔内を満たし、ローラーポンプ、熱交換器、特注回路で灌流を行い、胸腔内が 43℃ に達したら 30～40 分維持した。【成績】抗癌剤の最高血中濃度は、同量静注 30 分後の 10～20% と低く、副作用の発現はなかった。胸水コントロールは良好で、再貯留は 8.0% のみであった。M0 症例では、6 ヶ月生存率 93.6%、1 年生存率 82.0%、2 年生存率 36.9% であった。M1 症例では、6 ヶ月生存率 40.5%、1 年生存率 8.1% と不良で、延命効果は示されなかった。胸水を伴わない播種症例で、肺葉切除と灌流を行った症例では、1 年生存率 100%、2 年生存率 85% と良好で、5 年生存例も認めた。悪性胸水例で、灌流後に胸膜肺全摘を施行した 8 例では、全例 1 年生存し 3 年生存もあるが、1～2 年の間に再発死亡例が多く、適応を再検討すべきである。【結語】灌流による温熱化学療法は、局所の抗腫瘍効果が示され、集学的治療の一環として有用で、延命効果が期待できると思われる。悪性胸水を伴わない D1 症例では、切除と灌流の組み合わせで長期予後も期待できる。